

# 有栖山通信

一人の文士が二次元空間における病的恋愛思想を祖として織りなす純愛物語を近年秋葉原文化が到達した少女人物造形の精華の果てを近年進化したる軽量文芸形態への敬意と繋げ病みし情熱を以て筆を取り鍵盤を叩き電鼠を駆りて織り上げた怨念乃至は情念溢るる射干玉の如き小説也。

第一〇〇〇二四号

有栖山葡萄



空から女の子がふつてきた。

街にある小高い丘の上で少年が見上げた空に、彼女を包む輝く繭を見つけた。

この町で起きる春の風物詩は、秒速五センチメートルで落ちる桜の花びらよりもゆっくりと羽根のように舞い降りてくる。ただど彼女の相手は自分ではない。

そのことを少年は思いだし、青く澄んだ空から目をそらすように薄汚れた大地へと視線を落とす。

少女が自分の相手ではない理由を、彼は知っていた。

それは天の定めた、絶対のルール。

彼の視界の端で、少女が一人駆けだした。

きつと彼女が、天からの女の子に選ばれた相手なのだろう。

少年はもう一度、空を仰ぎ見る。

空の明るさに目を細め、落ちてくる繭の輝きのまぶしさに目を閉じた。

その瞳から涙が零れる。

かつて手にした少女のぬくもりを思いだし、彼はその場で静かに涙を流した。

「ごめん」

今はいない少女に語りかける。

「もうだめだってわかってる」

少年は涙を拭い目を見開くと、空に向かい宣言した。

「でもあきらめない、僕はきみを絶対に取り戻す」

## 1

「瑞穂君、どうしたの？」

朝の通学路で急に立ち止まり空を見上げた彼に、隣を歩く少女が不思議そうに尋ねる。

「ん、いやなんでもないよ。奈美ちゃん今日は日直だったね、急ごうか」

「そうだね」

どちらからともなく手をつなぎ、学校へと歩き出した。

「ねえ、部活はなにに入るか決めた？ 私は料理研究部つてのが面白そうだし、結構自由みたいだからそこにしよかなって」

二人そろって地元の公立中学に上がって、一週間が過ぎた。

偶然にも同じクラスになり、二人がいる時間は今までと同じかそれ以上になつていた。

「奈美ちゃんは料理すきだもんね、似合つてると思うよ」

「そうかな、ありがとう。で、瑞穂君は？」

「僕は、どこにも入らないでいようと思ってるんだけど」

彼女の問い掛けに、少し思案してから答えた。

「せっかくなのになにも入らないの」

「うん、何かしたいってこともないし、あとは家の手伝いもあるし」

「そっか、そうだね。じゃあ私も入るのやめる」

あつさりとした言いように彼は「えっ」と驚く。

「だつて瑞穂君がなにか入つてないと、一緒に帰つたり出来なくなるでしょ。それならなにも入らないでいた方が長く一緒にいられる」

「そんな、それじゃ」

「いいの、私はそれで」

話を終わらせるように、奈美は手を握る力を強くして彼を引つ張るように早足で先を急いだ。

「さ、早く学校に行きましょう」

彼女の有無も言わせない行動に、瑞穂は彼女の気持ちを感じ取つてなにも言わず従つた。

中学までの道程は普通に歩いて二五分程。家からしばらくは田園風景が続ぎ、幾分か店や家が増える町の中程手前に位置していた。

二人の周りにも徐々に人が増え始め、その中には同じ中学の制服を着た生徒も混じつていた。

奈美は手を握る力は変えず、歩く速度を周りの流れに合わせて少し緩めた。

「このくらいまでくれば、もう遅れることはないかな」

瑞穂は頷くと、彼女の手を離そうと力を緩めた。しかし彼女は離すまいと、逆に力を強めた。

「奈美ちゃん」

「いいの、別に見られたからつて恥ずかしくないから」

瑞穂が彼女を横目に見ると、奈美は怒つていた。

「別になに言われたつて良いじゃない。私たちつきあつてるんでしょ」

「そうだよ、うん」

瑞穂は緩めた手を再び握り直し、彼女を少し引き寄せた。歩く二人の距離が少し縮まり、手から伝わる不機嫌さはすっかり消えていた。しかし喜びだけではない、彼女になにか別の感情が交ざつているのがわかつてしまった。

「ねえ、一つ質問して良いかな」

「なにかかな？」

しかし彼女の質問はすぐには出てこなかつた。聞くことを戸惑つているようだった。不安になつているとき、彼女は無口になることを知つている彼は、黙つて言葉の続きを待つた。

「さつき立ち止まつたとき。もしかして、空に視えたの？」

——空に視えた

この町に住んでいれば今の季節に空に視えるものがあるか、それはそれ以上言わなくても判つた。

「うん、繭が降つてきた。でも、僕は受け取らない」

「そつか。ありがとう、瑞穂君」

二人が恋の温かきを知り、失恋の痛みを知らなかつた頃。

これからはずつと一緒にいることが当たり前のように過ごしていた幼なじみの二人にとつて、この日がすべての始まりだったとは知るよしもなかつた。

To be continued……

# いつもの戯言

はじめましてとおひさしぶり、本日は御立寄りいただきありがとうございます。ごいいますだびょん。

「有栖山 葡萄」と申します、しがない二次創作小説書き同人屋にごいいますだびょん。

来年はうさぎ年ってことで、語尾はぴょんにしてみました。

ってことで、一年ぶりにかえってきたよ！ ありがとう！！

君望ジャンルキーパーの自信があったのに、夏は落ちちゃいました。大人の事情がいろいろあったのかなあとか考えますが、当落は時の運なのでしかたないですよねん。今回は無事に受かって良かった良かった～

さて「君望 NovelSeries」12作目、いかがでしたでしょうか。なんか今回二回目登場の人が活躍しすぎじゃないかとか、黒い人の出番が少ないじゃないかとか、キモキモページ数が少ないじゃないかとか、まあいろいろあるかとはおもいますが、今回はこんな感じで。しかし孝之酷すぎるよね？（おまえがいうな）

そしてこの冬コミでは同じ age ですが「マブラヴ オルタネイティブ」に参戦！

サークル神慮の機械 維如星さんの合同誌に参加させていただきました。スーパーカーボン包丁を手に単身、横浜基地に侵入した BETA を殲滅していくコック・京塚のおばちゃんの活躍を描いた冒険活劇です。（うさぎばかり）オルタ方面も押さえてられる方は是非キちらもご覧いただければと。神慮の機械は「おっさんみーつがーる」を押しているようなので、次の夏にはそんな感じの作品で攻めようかしら……

最後に、ヤンデレ読者の皆さまに。

ヤンデレアンソロジー「属性 y d o 6」は既に執筆が始まっております。今回も新たなテーマを元に小説・コミックが集う予定です。発表時期を検討中でございますが来年の早い時期を目標にしております。是非ご期待くださいませ！ ヤンデレ大賞の発表もあるよ！

次回イベント予定は、いまのところありません。GW のコミティア・夏コミ辺りになるかと思えます。特に夏コミは君望 10 周年、ちょっと気合い入れていきたいと思っています！

今回も短編をつけてみました、お楽しみいただければ幸いです。

それでは、またどこかでお会いしましょう。

2010年師走 有栖山葡萄拝

2010年12月31日発行

発行所

おりすやまこうえん  
有栖山公園

<http://www.aliceyama.jp/>

budou@aliceyama.jp